

○昭和三十七年度學部卒業論文要旨

「白樂天研究」

——諷諭詩を中心として——

小川 卓男

研究の目的は、白樂天が自ら選んだ詩編「諷諭詩」一七二首を採り上げて、そこから文學者としての白樂天の一面をとらえてみることであつた。此の目的のもとに、彼の主張した「兼濟」、つまり民衆を廣く救うという信念の内實を、作品を通してさぐり出し、次に何故諷諭詩の如き詩を作るに至つたかを考へてみる事にした。推論の順序を次の様に構成して進めた。

序文

第一部、諷諭詩の作品分析

第一章、成立

第二章、詩形

第三章、内容

第四章、作品分析とその考察

(一)、分析の方法について

(二)、分析結果

(三)、分析結果に對する考察

第二部、諷諭詩の製作意圖と動機

第一章、創作意識

第二章、「兼濟」の思想的背景

第三章、諷諭詩製作時の白樂天

第四章、「兼濟」に影響を及ぼした詩人達

此の研究から、第一部では二つの結論が得られた。一つは、諷諭詩には純粹に寫生的な詩、及び敘情的な詩は皆無であるということ一つは、政治的な内容を盛つた詩、廣い意味では、民衆の幸福を願つた詩が、民衆に向けてよまれてはいないということである。

前者の事實は、白樂天が「兼濟」の思想表白の目的のもとに、嚴しい基準を設けて、多くの詩の中からその基準に合致する詩だけを選り出して諷諭詩を編んだ結果だと思われる。

後者からは、彼が「兼濟」の實踐方法としてとつた詩人としての態度がどの様なものであつたかを知る事が出来る。即ち、彼の唱へた「兼濟」とは、詩の上では爲政者の自覺を促すことにあつたのである。民衆が救われる道は、結局爲政者の覺醒にまつほかはないと考へて、民衆の聲を、いわゆる「諷諭」の形で爲政者に伝えることを文學者の使命としたのであるとみたい。白樂天は、民衆が救われるのは、彼等民衆自身の力によるのではなく、あくまでも爲政者の力によるとみているのである。だから、民衆に向つて同情し、激勵し、彼等が救われる方法を説く事はしなかつたのであろう。民衆の幸福を願つた詩や、政治的な内容を盛つた詩で、民衆に呼びかけた

ものがないのは此の爲であると考える。

一方、この様な白樂天の態度は、結局支配者の一人である官吏としての自覺から来るものではあつても、民衆の生活に同化し、民衆の一人として、眞に民衆の立場から詩を作つたという事は出来ないのである。ここに、「兼濟」の特質と限界があつたといえる。

魯迅研究

—左翼作家連盟成立期における—

鈴木 通代

私は卒論で左翼作家連盟成立前後における魯迅の雜文を扱つた。作品でいうと『二心集』『三閑集』の時期に當る。雜文そのものとして私が感動したのはむしろ、他の集に多かつたにもかかわらず、この時期の雜文をとりあげたのは、ここに、魯迅雜文というものの全體を貫く文學的思想がもつとも直截に表われていると感じたからである。なぜなら、魯迅の文學が生まれ、さまざまに變形し、中國革命の偉大な文學者としてその生涯を終えるまで、魯迅は、それが一部のものではあつたとはしても、つねに、中國の民衆を代表する民衆とともにあり、中國革命の發展と後退の中で自らの文學を創出したのである。したがつて魯迅の文學のいくつかの轉形期は、中國の民衆と革命の轉形期の中にあつたし、他方から言えば、それは魯迅の文學的思想の轉形期であつたのである。左連成立期はそのような魯迅の文學的思想が最終的に決定された時期であり、それはまた、中國革命がその前後數年間の混亂から最終的に方向を確定する歴史的な流れの中にあつた。魯迅は革命と文學戰線の混亂の中から、自らの

方向をさぐりあて、それを文學的に定着したのであるが、この魯迅文學の變形の過程は、決して單純な轉換ではなかつた。それは、魯迅のそれまでの生と文學活動の有爲と無爲、有力と無力に對しての嚴しい再檢討の過程から生まれ、それらを維持しつつ、新しい文學的思想を形成したのではなかつたろうか。その意味において、やはり、左連成立期の魯迅の雜文は、他の魯迅雜文の白眉というべきものの文學的感動の本質をさぐり出すうえで重要な位置を占めねばならないだろう。

私の讀んだかぎりにおいて、魯迅の雜文は單なる批評や感想ではなく、また、戰闘の武器にとどまるものでもなく、何よりもそれは中國そのものを、民衆を通じ、民衆の絶望と苦惱から勝利の確信に至るまでのさまざまな人間像を通じて、文學的に認識し、それを文學的形象として造形したものである。魯迅は中國社會の暗黒と中國民衆の絶望と沈黙そのものの中に光明とその擔い手をみたのであり、それゆえに魯迅の雜文における文學的發言は政治的發言となつたのである。したがつて魯迅の戰闘は文章の中での戰闘、文章による戰闘を目的としたのではなく、社會的な戰闘そのものへの参加と不可分であり、それはまた戰闘者のための戰闘であつたのである。それゆえに魯迅の難解さは、中國革命における戰闘の複雑さと不可分であり、私は、雜文の諸形式からではなく、中國そのものの社會發展の方向と革命の過程を明らかにし、その中で魯迅の革命思想と文學思想に立ち入ることによつて、魯迅文學に接近しようとした。そしてさらに、『二心集』『三閑集』の時期における魯迅の文學的思想の新たな形成の過程を、不十分ながら、追求しようとしたのである。

王漁洋の神韻說研究

野 地 安 伯

今日、漁洋理論とその作品とが、

迷離恍惚的「神韻」的烟幕下、王士禛（漁洋）抽去了文學的本質。

（北京大學・中國文學史）

として、ほとんど一方的に輕視されているのは、例えば

行人鑿纜月初墮 門外野風開白蓮 （再過露筋祠）

に代表されるような、漁洋自身の絶唱の存在を意識するとき、いかにも惜しいと思う。私のこの研究は、そこから出發した。

考察の中心を、漁洋の指摘する「神韻有る」詩においた。

次に抄出した數句は、いずれも、漁洋が特によしとしたものである。

明月松間照 清泉石上流 （王維）

雨中山果落 燈下草蟲鳴 （王維）

雨止僧竹間 流螢夜深至 （范德機）

松雨時復滴 寺門清且涼 （崔國輔）

時有落花至 遠隨流水香 （劉昫虛）

これらの句には、一樣に、ある清らかな雰圍氣を漂わせた自然が詠われている。その自然から發せられる清潔感に、われわれはまずひかれる。このことは、漁洋の代表的選集である「唐賢三昧集」についても、また漁洋自らの作品についてもいえる。

ともかく私としては、實作における漁洋理論の中核を成すところ

の、「古」と「平淡」とを、あまりにも無色な、枯れ盡くしたようなものとして、受けとることはできない。

神韻說にとつては、「自然」の存在こそ、不可缺の要素であつたと考えられる。そしてその自然は、最もおだやかな、美しいときにおいてとらえられ、詩人の詩心と微妙に融合しあつた。そのために、必然的に、詩人自身の精神の安定性が要求されたわけである。激情をそのままたぎつければ、漁洋のいう「神韻」は失われる。そこに、反漁洋、反神韻派の主張もあらわれてくるのではあるけれども、しかし、文學のありかたの中には、このような、超俗的な雰圍氣を尊ぶ理論もまたあつていいはずのものであらう。

安定期に向かいつつあつた清代初期における、平和なる文學理論のひとつとして、私は王漁洋の神韻說を高く評價したい。

杜甫研究

——成都時代——

野 津 壽 一

偉大な詩——廣く藝術一般についても言えるかもしれぬが——の誕生する時期というのには、二つある。一つはその作者の窮乏の時期であり、一つは、あらゆる面で最も恵まれた時期である。

貧しい時期の詩は、暗く、憂愁に富む。杜甫はその憂愁をうたつての、世界におけるチャンピオンと云つて過言ではあるまい。しかし彼にも、愁いをもとすれば忘れる時期はあつた。それが成都時代である。

この時期は、幸少なき彼の生涯において最も幸福な時代であつた。

美しく、穏かな自然と、人間味豊かな、暖かい友人の援助のもとに彼はのどかな日々を送ることが出来た。口ずさむ詩も、およそ杜甫らしくない、本来の杜甫を離れた方向へと展開する。

この時期の詩人の特徴は、何よりもまず、自然および周囲の人々へ對するまなざしが穏かなことである。とかく彼の詩の中にあらわれる自然というのは、暗く不氣味であるが、この時期の作品には、それがほとんどない。安定した生活の上にあぐらをかいていた當時の彼の眼は、秩序ある、美しい自然のさまを極めて穩かに受けとめている。かつ、その眼は決して自然界へのみ向けられたのではない。穩かなまなざしは、善意あふる友人達にも等しく投げかけられる。これらの事柄は彼の生涯の他の時期においては、しばしば見られるものではない。不遇な彼は、社會、特に人間界へ對してときおり病烈ないきどおりを投げかけた。けれども成都時代の詩には、それが極めて稀である。彼の眼は、自然および人間へ向かつて常に微笑みを持つて對している。

第二に、彼の詩には色彩豊かなものが多いが、その華やかな色彩が、ひととき輝を増した時期、それは成都時代であらう。王維は、「偶然の作」の中で

宿世詞客に謬まらる

前身は應に畫師なるべし

とつづやき、繪畫の方面でも一世を風靡した達人であつた。したがつて、詩人王維を、繪畫性の面からこうとする試みはしばしば行なわれているようである。しかし、杜甫をその方面からとき起こそうとする試みはそう多くはあるまい。だが、杜甫ほど色彩をあざやかに、巧みに、詩においてより效果的に使い得た詩人は、他にな

いではあるまいか。

成都時代に生まれた作品で、文學論を述べて有名なものは、「獻爲六絶句」である。

スケールの大きな、ますらおぶりの詩をよまねばならぬという主張は、李白の「古風」——其の一——に顯著であるが、杜甫のこの絶句の言わんとすることは、李白と全く一致する。當時の彼の、詩はいかなものであらねばならないか、という考えについて論じたのが八第三章Vである。

杜甫は、一生仕官の念が強く、その望みは終生變わることなく持ちつづけたようにいわれているが、晩年の彼——少なくとも成都時代の彼には、それがほとんど見當たらぬように思われる。當時の詩人の心境を、詩を例にとりながら論じたのが八第四章Vである。

自孔子至孟子、政治思想之展開

平岡嘉泰

一、論語に對する私見

(一) 徳——仁——禮と、縱の關係が成立する。(仁を中軸として、抽象・

具象に發展)

* 曰、何事於仁、必也聖乎。

* 克己復禮爲仁。

* 孝弟也者其爲仁之本與。

(二) 帝王學としての政治思想。

(三) 孔子の説く政治思想が當時功を奏さなかつたのは、理想的過ぎ

たというよりはむしろ、痛烈な現状政治批判であり、爲政者の地位を脅かすものであつた。

* 三桓の寡頭政治批判(八佾・季氏・他)

門師と弟子間に於ける意見の對立。(つまりこのあたりの見解の相違から後代の分派活動へと發展すると考えたい。)

* 孔子の政治活動への進出に對して、子路が反對する。

* 顏淵死。門人欲厚葬之。子曰、不可。門人厚葬之。

* 先進・後進の義は古注その他で諸説あるが今朱注の意をとり、

門弟の中の高弟、若手グループとした。)

二、孟子に對する私見

(一) 孔子は「仁」を説くが、孟子は「仁義」を説く。これは思想の發展という段階を経ることによつて、外にあつては異端に對する絶對的優位と、内にあつては主流派の確立に努めるためであつた。その理由は左記による。

* 孔子の時に見られた門弟の對立、(主觀派・客觀派)——精しくは本文——

* 孟子は孔子の孫子思の門人に教えをうけ、その教えは、概ね主觀的立場にある。

(二) 法に對する考え方の相違

孔子は法治主義を非難したが、孟子は税法、井田法、その他を進言した。それは何故か。

イ、孔子は法の全廢を説いたのではないと考える。本來「法は徳に包含されるべきもの」であつて、孟子に至つて以前とは違つた立場から表面化した。つまり徳治主義——孟子はこれ

を王道論として扱つたが——を國政に及ぼす上には一つの手段として用うべきであるとして、法に對する評價が變つて來た。

ロ、又これらの法は彼の説く王道政治で民衆の納得するものでなければならぬ。そうなければ、もはや孔子の言う「徳」を阻害するものではないという考えからではなからうか。

(三) 葬葬説に見られる矛盾。(墨家の夷之との對立に於いて。)

——孟子の言行の中でみられる唯一の缺點である——

論孟二書は内容がよく似ているという概念を持ちやすいので、二書の相違を求め、從來研究されて來た研究テーマとは異つた觀點から見て行こうとしたが、概論的で内容も浅いものに終つてしまつた。

老舍文學研究

——「四世同堂」を中心として——

平 松 辰 雄

老舍(一八九八年～)の作家生活は長く、殘してきた作品も多岐に亘り、作品數も甚大である。これらの作品にみられる特質を彼の最大力作とも考えられる大長篇三部作「四世同堂」(一九四五～四九年にかけ執筆)を中心として上げて考察してみた。何故これを中心にして考えを進めていつたかと言うと、これは彼のそれ以前の作品とは異つた明確なる意識をもつて書かれた作品であるとともに、又それ以前の作品にみられる方法も巧みに活用されており、時期的にも被侵略——内戦——解放という大きな歴史的境界における作品でもあるからである。即ち、彼の生活に直接帝國主義の侵略が迫り濟南

を脱出して救國運動に加わることを通して民族意識が高揚され、それがこのテーマになつていたのであり、その方法としては彼の初期のユーモア小説といわれる作品（『老張的哲學』、『趙子曰』）の系統をひくものが流れている。

彼は北京の下町の没落旗人の家に生れ三歳にして父を亡い困窮の中に幼・青年期を送つた。五・四に始まる近代化の嵐にも直接には動かされず、英國に渡り故郷をなつかしんで書いた『老張的哲學』が作家となるきつかけとなつたのである。そこには何ら中國の近代性に眼を向けてそれを打破しようという積極的な意識はなかつた。『買いたてのカメラでパチパチ撮る』（『老牛破車』）という書きぶりだつたのである。こうした意識より出發した文學であつたが次第に庶民の悲哀を描く作品も現われるようになる。だがこれも當時の文學界の中心勢力の持つ意識とはほど遠いものであつた。一九三七年の蘆溝橋事變に始まる日本軍の心臓部侵略に對し彼自身はつきりした態度で、文學者として可能な方法で救國運動に乗りだし、この期の總決算として、陥落した北京西城の中産階級一家四世代を中心にして侵略されるということが如何なることであるかを現實に起つた歴史的事實をおり混せて、三部百萬字の計畫で書き始めた。だが日本軍の降服により侵略は終り、翌年第二部まで終つた所で米國に招聘され第三部は米國滞在中に書かれ、現實は既に國共内戦という問題が起り現實との間隙が開いたため第三部には構成上の破綻も見られるが、全體を通しては民族主義に貫かれている。これは數作者的文學意識に出發した老舎の一大變革である。解放後いち早く今までの自分の缺點を改良すべく努力し、戯曲・評論を中心に活躍している。

彼の文學意識が現實政治に追いつけなかつたことは事實であるが彼の文學が彼自身の生れ育つた北京とそこに住む庶民とその土語をとり入れて書いたことは、彼が如何に北京を自分の故郷として、自分の國の首都として愛していたかのあらわれであると言うことはできよう。

現代漢語規範化について

松 尾 善 弘

一九五五年十月、首都北京で第一次全國文字改革會議と現代漢語規範問題學術會議が相次いで開かれた。これらは新しい國家建設の一翼として當然確認さるべき問題であつたが、特に前者即ち文字の簡化——表音化と車の兩輪と目される規範化の問題は思想交流をスムーズに行う爲にも初めに根本的問題として解決策を講ずるべきものであつた。しかしとにかく、前者會議に於いて、歴史的（民族發展及び言語發展過程から）にみて、又文化的、經濟的、政治的見地からいつても、『漢民族共通語は北方語を基礎方言とし北京語音を標準音とする』のが妥當であるとの結論に達し、以後この線に沿つて普通語を推進しようという決定が打ち出されたわけである。

ところで一口に北方語を基礎方言とし北京音を標準音とするといつても、周知の如く、方言が亂立し複雑な状態にある中國に於いて思想的にも個々の問題についてもそう簡単に事が運ぶ筈はないのである。例えば北京語そのものの中に語彙、語音、語法にわたつて、普通語としてひろめるに價しないものがいくつもあり、逆に他の方

陶淵明研究

松本昌也

言の中には共通語として使用するのに適確且つ有効なものが澤山あつて、これらを一律に排斥してしまうわけにもいかない。そこで北京の土俗なことを捨て、他方言の中から適切なことを採用してより豊富なより力強い標準語を形成していかねばならないが、その取舍の規準をどこに置くか、或いはことばの純潔と健康を守る爲にどのような點に注意していくべきか——その方向を各分野から検討して探り出そうとしたのが後者會議であつた。それらは抄出すれば①語彙方面では尖國音問題、ル化問題、輕重音問題、一字異讀問題、聲調問題、②語彙方面では同義語問題即ち方言、文言、外來語の混亂を如何に是正していくかという問題、③語法方面としては語法體系そのものと虚字の用法、④その他辭典工作や文學言語、出版、映画演劇、放送、教育、翻譯等々がその主な研究對象としてとりあげられたのである。

私達は「規範」という語感からえてしかつめらしい枠にはまつたドグマ的なものを想像しがちであるが、これは決してそういう息苦しい言語の自由な發展を阻碍するものではない、むしろ「約定俗成、穩步前進」即ち一般大衆の中で最も普通に話され、又行きわたる可能性のあるものを第一にとりあげ、徐々に改善、前進しようというものであり、且つ又その規準はあくまで「言語發展の内部規律」に基いていることを認識しておきたいものである。そして私は昨今の日本の國語問題を眺めるとき、漢字の問題にしろことばの問題にしろ、或いは又漢文教育についても、もう少し明確な「方向づけ」、「體系化」がなされてしかるべきではなからうかと思うのである。

生の保持は人間の本能的、且つ根本的欲求である。従つて、古來生の消失——死は常に人間の根本問題であつたし、現今に於いても大問題である。その點について中國ではどうか。悠久四千年の歴史を有し、その間變轉極りない社會に多くの優れた思想家、文學者を輩出した中國。然るにその長い文化の歴史の中に、思想界、文學界を通じて、死生についての意識が問題となつて表われる例は少いようである。

本稿はその數少い例の中から、東晋の詩人、陶潛、字淵明をとりあげてみた。従つて、題目は「陶淵明研究」であるが、本稿では陶淵明を全體的にとらえるのでなく、淵明の詩文にみられる死生觀がどのようなものであるか、及び死生の意識の處理が如何になされているかという二點を主なる問題として検討したものである。

淵明の死生觀を明らかにするためには、中國に於ける死生觀の歴史を知る必要がある。しかし、現在それをまとめた書物は見當らない。

そこで本稿では便宜的に、中國思想界の二大主流であり、淵明に影響を與える所が大きい儒家と道家の書の中、「論語」と「莊子」とを選んで、その死生觀を簡単に検討してみた。この二書を選んだのは、この二書が儒、道二家の代表的書物であるという理由の外に前記の二書から淵明が特に多く影響を受けていると思われるからである。

以上に述べたような事柄を中心として、検討した結果をまとめたのが、次の四點である。

一、淵明の死生觀は、生を限りあるもの、幻のようにはかないものと意識し、死を完全な、そして永遠なる自己消滅として、死の世界に何等の意味をも認めない（例えば、死を神に召されるものだとするような宗教的な意味をも認めない）というものである。

一、死生の意識を處理するについて、理性的には達觀の境地——死生を自然の動きに委せ、自らは深く思いつめて心を悩ませることはしないという境地に到達し得たものの、感情的にはそれを完全に承認できず、終生矛盾する感情を示す。

一、生ははかなく、死は空無に歸するものだとする自覺は、せめて生存中は心のままにするのがよいという考え方を生じ、それは混亂した社會情勢に對する嫌惡感と相俟つて、“俗惡な世間から脱して一人、古の聖人、賢人に習つて道を守る”という志に、忠實であらうとする生活態度を生みだしている。

一、淵明に影響を與えた儒家と道家の書の中、儒家の「論語」は、死生觀に關しては、淵明に殆ど影響を與えなかつた。というより、影響を與え得る思想を備えていなかったといえる。亦、道家の「莊子」は、淵明の死生に關する意識を深めるものとして影響を與えたといひ得るが、その、死生を一條とし、或いは死を本來なる姿とする死生觀は、根本的には淵明の受入れるところではなかつた。

太平御覽引史記の研究

吉野弘造

太平御覽の成立は、北宋の太平興國の二年（A.D. 九七七年）で史記の最古の板本の中で、最古のものとされている淳化本（現存しない）の刊行以前に成立している。この事は、善本に乏しいと言われている史記の本文校訂に重要な價值があると思われる。既にこの事は、清朝の考證學者達——梁玉繩、王念孫、張文虎——が、しばしば史記の本文校訂に、太平御覽引史記を用いている點にも伺えるが、それらには、魯實先が指摘する如く、誤りが多く、亦、徹底的に研究され、利用されていない。この事は、從來、太平御覽は、そのテキストとしての性格が不明確であり、引用の仕方にも正確であるのに由來すると思われるが、私は、現存する史記古鈔本並びに、これに準ずるテキストを用いて、太平御覽引史記の性格を、明らかにし、その史記の本文校訂に於ける價值を明らかにしようとする研究した次第である。

さて、太平御覽に引用されている史記は、一千六百四十九條。私が調査したものは、一千二百八十三條である。これを、今本史記（慶元本）と校勘（この場合、太平御覽の作者達が、史記を、はなはだしく改變して、太平御覽引史記としている場合は、たとえ、字句移動があつても、採用しない）の中、史記の文章を所々省略しているもの四百三十條餘り、改變しているもの九十條餘り、史記の文章でないと思われるのに史記曰としているもの十三條。このような點

から、從來、太平御覽は、そのテキストとしての性格は、不正確、不明確であるとされてきたことだと思われるが、一步前進して、太平御覽引史記を調査した結果史記古鈔本と一致するもの五十六條。史記古本と一致するもの百八條、その他の板本（鄒誕生、劉伯莊、索隱、正義）と一致するもの十三條。合計百七十六條。百七十六と言ふ數は、少ないようであるが、史記全體からみれば、史記古鈔本史記古本の現存部分が多いと言えず、又、太平御覽引史記がその史記古鈔本、史記古本の部分を引用している部分は、亦、少いので、その両者が、たまたまそろつて、存在する部分は、極く、限定されたもので、それを考えると、百七十六條と言ふ數量は、決して少いとは言えないと思う。この結果から見ても、太平御覽引史記は、今本史記とはテキスト的に少し異つた、史記古鈔本、史記古本と言つた史記の古い姿を伝えるものに類似していると斷言して差支えないと思う。このことは、太平御覽の成立年代からみて、極めて當然な事であるが、從來、このあたりまえの事を論定し得たものは、ないと信じる。これは、ひいては、史記テキストクリティックの場合に於ける太平御覽引史記の果たす位置を明らかにし得たものと思う。これはやがて、太平御覽に引用されている種々の典籍が、現在佚している、いないに拘らず、極めて、注目すべきものであることを、想像することが出來よう。

小説家 吳趸人研究

宮 内 保

アヘン戦争（一八四〇）以後の中國の國家的な危機が、魯迅に小説を書かせる起縁となつたことは周知の事實である。しかし、この點だけから彼の作家としての新しさ・ユニークさを語ろうとするのは間違つてゐる。というのも、そうした種類の動きは、すでに吳趸人に代表される「晚清」の作家たちの中にすら見られるからである。このことは、早い話が、魯迅自身その『中國小説史略』に認めている所である（同書第二十八章参照）。

吳趸人は、あの康有爲に八年ほど遅れて、同治五年（一八六六）同じく廣東省の南海に生れてゐる。廣東省といへば、廣州を中心に、清末から民國初めにかけての多くの革命家を産した地方である。このことは、洪秀全は別としても他の人々―例えば康有爲や孫文らの場合、廣州一帯がいわゆる帝國主義侵略の矢表に立つたことと無關係ではない。南海はその廣州のすぐ南に接した縣である。そんな場所に、一應、名門（むろんコチコチの官僚の）と呼んで不都合はない家の嫡子として、彼は少年期を送つてゐる。そして宣統二年（一九一〇）秋、上海の、恐らく貧乏長屋同然な家に、小説家として没している。この間、彼は絶えて官界のバプテスマを受けたことがなかつた。當然官僚になるべく生れた彼がそうならなかつたのは、複雑な清末の官界の内情が彼を閉め出したたであつたらうと思われる。我々はまずもつてこうした事柄に注目しておかねばなるまい。

とも角も、吳趸人は、清朝の――というよりは中國史上の最も多難な一時期に生きたことになる。因に彼の生涯は太平天國と辛亥革命という、二つの民衆革命に挟まれていたのである。我々が「晚清」の名で呼び慣れているのは、蓋しこの時期のことで、それは、單に二

つの頂點に挾まれた谷とか山とかいつた言葉からはおよそ趣を異にしている。つまり、晩清なる熟語の中に「晩明」或は「晩宋」になり、それらとは根元的に異質なイメージの含まれていることは確かなのである。もちろん、これを歴史の流れのほんの一現象にすぎないと考えることも可能ではあろう。が、その際にも、我々はこういうことをもう一度反省しておく義務を持ち合わせてはすまいか。即ち、人間の歴史とは、皮肉なことながら、眞の混亂の中でしか新しさ―新しい方向・動きを見せてくれない仕掛になつてゐるらしい、ということである。かくて、晩清は實に多面的な混亂を現出させてそれまでと違つて、過去の安易な繼承と改良とを許さなかつた時代なのである。これを文學についてみれば、その歴史上に、小説の地位を決定的に刻みつけた時代であるといつてよいであらう。

確かに、中國の小説は、世界の二十世紀文學の一般的傾向と同じく、文學界の第一等にのし上つた觀が強い。但し、この新しい方向は、必ずしもヨーロッパと同一な要求・志向から生れたものではない。それは多分に教條的で政治主張の宣傳の要素を含んだものだつた。この意味で、晩清小説は、いわゆる舊小説との間に明顯な斷層をもつてゐるといえる。舊小説からの訣別であると同時に、作家たちの多くがもつたエネルギー・使命感は、次の文學革命（一九一七）以後の作家たちの先驅をなすものだつた。なお、ここにいる訣別とは形式についていつてゐるのではない。形の上からいへば、晩清小説と雖も、舊小説そのままの章回小説である。

吳趸人を含めて晩清の作家の使命感の根底をなしたのは、匡國・救國・國家の強化といった言葉で表現されるものに外ならない。つまり、彼らは、愛國の志士ではあつても、作家に必要な自我

意識という點では、遙かに前近代的であつたといえる。このことは晩清小説が、康有爲―梁啓超に代表される、いわゆる改良派の政治・思想家たちの啓蒙に端を發していることを知れば、さして驚ろくにも足りないことなのである。いうならば、晩清小説は「政治」文學」なる古い文學形態への復歸を底邊に秘めていたのである。就中、吳趸人は、そうした小説界の代表選手だつたばかりか、彼が、梁啓超によつて打ち立てられた「小説論」の強力な實踐者という域以外に出ない作家だつたことはまぎれもない事實なのである。

吳趸人の中には、しかしながら、僅かではあつたが、自我に似たものもあつたことも事實である。我々はまたこの點をも見逃すわけにゆくまい。《九命奇冤》の中に、彼は、『貧官汚吏、佈滿廣東、弄天日無光、無異黑暗地獄』といつてゐる。ここにいつてゐる「廣東」が、何も廣東省というただか南域の一省を指していつたものでないことは斷るまでもあるまい。彼にしてみれば、それは「中國」の同義語に外ならない。「恐らく康有爲ほどに外患を強調した論者は、他にその例を見ないであらう」（小野川秀美・《近代中國研究》一八頁）という言い廻しは、同じ廣東出身の吳趸人にもそつくりそのまま當て嵌りそうであるが、彼にはより以上に、『貧官汚吏佈滿』的中國なる意識が、その一生につきまとつてゐたといえる。これこそ、南海の名門に生れながら、當時のインテリの中でも末流に屬する小説家（趸人は生涯そう思つてゐたらしい）たるに甘んじねばならなかつた者の、社會に對する憤懣でなくて何だつただろう。

以上からほゞ察しがつくように、吳趸人のもつてゐた作家として

學會彙報

○昭和三十七年度漢文學會總會

〔漢文教育研究會〕 六月二十三日(土) 於赤城臺高校

一、研究授業

二年、漢文 實施者 月洞 讓氏

一、研究會 司會 志賀委員

(イ) 開會の辭 司會 志賀委員

(ロ) 當番校挨拶 赤城臺高校 吉田校長

〃 〃 土肥校務主任

〃 〃 多和田國語科主任

(ハ) 質疑討論

授業擔當者挨拶 月洞教諭

〔研究發表會〕 六月二十四日(日) 於東京教育大學

一、六朝の詠懷詩について 司會 鈴木、今井委員

一、司馬遷の「天道」に對する懷疑と不信について 大學院 沼口 勝氏

一、詩に反映せる日清戰爭 大學院 中村 嘉弘氏

一、明治初期 松本邊における漢字の模様 大學院 許 常 安氏

一、近代と漢學について

一、歐陽修の態度

一、宋代經書解釋史からみて

信州大學 千原勝美氏

の自覺は、まだまだ中途半端なものであつた。彼は所詮舊時代のインテリでしかなく、「人間」について考察するタイプの作家ではあり得なかつた。従つて、その世界觀が極めて限られたものだつたことも亦自然だつたといえる。例えば、彼は、康有爲らの運命には同情しても、同年の孫文及びその一派には毛ほどの同情も示していないのである。だが問題はまだ残される。思うに、我々が「晚清」の意味に魅了された時はじめて、小説に新しい方向づけを與えるに最右翼だつた作家・吳趸人の存在意義は價値を滞びてくるに相違ない。

○鐘嶸「詩品」研究

富安 泰正

○王 弼

丸橋 紀久枝